

「帯江研」だより

帯江鉱山研究会が誕生

倉敷市中庄一帯で明治～大正期にかけ操業した帯江鉱山の全容に迫ろうと、帯江鉱山研究会が9月13日、岡山市北区南方のきらめきプラザで設立総会を開いた。総会では会設立の趣旨説明が行われた後、規約や役員、今後の活動計画などが審議され、研究会の発足を決めた＝写真。

当日は長期化するコロナ禍の中、“3密”に配慮しながら賛同者9人のうち、5人が出席した。最初に同会設立準備会の呼びかけ人の一人、戸板啓四郎・中庄の歴史を語り継ぐ会代表が「地元としても鉱山の全容は是非とも知りたい」と挨拶した後、引き続き議長を選んで規約などの議事審議に移った。

その結果、会代表に小西伸彦・産業遺産学会理事、事務局員2人の役員が承認されたほか、同会は今後年2回の例会報告会とともに活動成果の情報発信を心掛けながら随時、講演会や遺

跡探訪、他団体との情報交換会といったイベントなども開いていくことを決めた。

同研究会は「帯江鉱山に関し、広く興味、関心のある有志者の方の参加を歓迎している」と呼び掛けている。



研究会の設立にあたり

歴史を葬り去っていかないと、封印されようとしていた時間の扉を開ける決意をなさったのが坂本昇氏と戸板啓四郎氏です。不肖は十五年前、吉岡鉱山の遺構調査を始めたとき、郵船汽船三菱会社が借区とした帯江鉱山を知り、少しばかりの遺構調査をしました。そのこともあってお声をかけていただきました。じつはいま、東京の産業遺産情報センターとのあいだを行き来しています。みなさまにご迷惑をおかけすることのないよう注意いたしますが、半面、国内外の産業遺産情報を提供申しあげることができるかもしれません。はなはだ浅学ですが、どうかよろしくお願いいたします。

小西伸彦



律令体制確立期から、日本の鉱山には三つの変革期があったといわれています。とくに第三の変革期にあたる近代は、中央と地元資本が拮抗する競争の時代でした。しかしそのわずか百年の記録が失われつつあります。先人の夢と野望が築いた

会の歩み (敬称略)

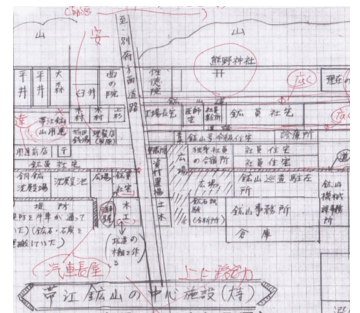
2020年

- 8・20 坂本・戸板2人が会い、会設立に向け、呼びかけ人に
- 8・29 坂本と小西が面談、会設立を話し合う
- 8・31 戸板、小西、坂本の3人が初顔合わせ。会の設立準備会を結成
- 9・8 坂本は難波に面会し、監査役の内諾を取る
- 9・13 岡山・きらめきプラザで設立総会。賛同者9人中、5人出席。規約や活動内容、役員決める
- 10・4 岡山木村屋で初の役員会。会の基本方針や具体的運営を協議、次期臨時例会で報告することに
- 10・8 郵便局で通帳開設手続き、きらめきプラザへ任意団体登録申請
- 11・8 岡山木村屋で役員会。来年開催の例会について協議
- 11・15 きらめきプラザで臨時例会

池田陽浩氏の想いで

おびえナビ No.1

先日、「帯江鉱山」に関する資料を整理していて一枚の手描き図を見つけた。7年前に亡くなられた池田陽浩氏がかかれたもので、2008年9月に開催したフォーラム「旧帯江鉱山の歴史と現状」のレジメの一枚であった。図には私が編集のため記入した朱書きも見える。フォーラムは倉敷市民企画提案事業として開催され、午前中は「帯江鉱山」の遺構調査、午後は講座であった。大変残暑の厳しい日で、午後の講座では池田氏は鮎詰めの教室でたびたび汗をぬぐいながら熱弁をふるわれたことを憶えている。池田氏は、私が郷里の中庄に帰る20年以上前に、教職の傍ら地元の人たちと「中庄の歴史と文化を語る会」を立ち上げ、郷土の歴史、特に「帯江鉱山」の研究に取り組んできた尊敬する研究者の一人であった。今回、帯江鉱山研究会が設立され池田氏もきっと泉下で喜んでくれているに違いない。(戸板啓四郎)



今後の行事・予定

11月15日	臨時例会
2021年 1月17日	第1回例会・報告会、交流会
6月13日	第2回例会・報告会、総会

産業遺産雑感

石井十次の長女・友子を夫人に迎えた児島虎次郎を、大原孫三郎は酒津の別荘・無為村荘に住まわせた。アトリエを建て、無為堂と命名した児島は、大正時代になり点描による筆触分割で「酒津の秋」と「酒津の農夫」を描いた。2枚の油彩画の借景となった、木のない煙突山が帯江鉱山だと知ったのは、児島の没後70年展が全国を巡回した平成12(2000)年であった。

巡回作品の中には「坂本風景」という暗い風景画もあった。制作年不詳となっていたが、児島が第1回ヨーロッパ留学に出発した明治41(1908)年以前の作品である。日本に印象派を伝えた黒田清輝らの色彩も、渡欧前は暗かった。ところが印象派の洗礼を受けるや「ヤニ派」から色彩香る「紫派」に変化したのである。児島は「落穂拾い」で知られるミレーを尊敬していた。ミレーらバルビゾンに会した画家たちは印象派のひとつ前、写実主義の時代を築いた。児島は坂本で写実主義に挑んだのかもしれない。坂本は明治26(1893)年から昭和6(1931)年まで、吉岡鉱山の主要施設があった高梁市成羽町坂本である。現役銅山の斜面の手前には三菱合資会社役員住宅の三角屋根が描かれている。いまや山々にはすっかり自然が戻ったが、三角屋根はいまもある。

郵船汽船三菱会社は明治17(1884)年と19(1886)年、中庄村の大栄鉱山と興共鉱山を買収して吉岡鉱山の支山・帯江鉱山としたが明治24(1891)年、坂本金弥に売却した。坂本

は明治時代末期、帯江鉱山を吉岡鉱山と肩を並べる銅山に成長させた。しかし鉱山景観はすでになく、跡地が住宅地になって住み始めた世代には、かつてそこに銅山があったことをご存じない方も多という。昭和30年代まで国内屈指の産炭量を誇った福岡県の炭鉱遺構も次々と姿を消し、筑豊炭田の象徴・ボタ山も数例を残すに過ぎない。

産業考古学は民俗学同様、去りゆくものへのノスタルジーから生まれた。鉱山の歴史や遺構の調査を得意分野とすれば、鉱山の生活や祭礼、炭坑節などの歌謡などは民俗学や社会科学のフィールドかもしれない。三池炭鉱と高島炭鉱は世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産になり、山本作兵衛の炭鉱絵は「世界の記憶」に登録された。その舞台には鉱夫や家族たちの喜怒哀楽が刻まれている。そう思うとその地が愛おしくなり、何度も訪ねるようになる。人々の歴史が見えてくると、ついつい深みにはまってしまう。困った産業考古学である。(小西伸彦)



児島虎次郎「酒津の秋」
大正6年、油彩・画布、大原美術館蔵



児島虎次郎「坂本風景」
制作年不詳、油彩・画布、個人蔵

坂本金弥を語る ■ 1 ■

一評判の孝行息子

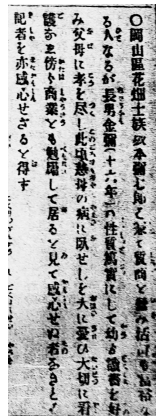
「余唯一たび交話し大に敬意を發せり、是人後ち必ず名を成す可し」。明治のベストセラー作家でもある中江兆民が、著書『一年有半』の中でこう評した人物が、誰であろう坂本金弥(以下「金弥」)その人である。

帯江鉱山で財を成し、傍ら代議士として中央・地方政界で活躍したことから多少の事績は語られているものの、若い頃の金弥の様子を知る資料は皆無に近い。

ところが、である。現・山陽新聞の前身である地方紙の老舗「山陽新報」は、さすがなのだ。明治14(1881)年の一つの記事には、まさに目から鱗の思いであった。

「父母に孝を尽し此頃慈母の病に臥せしを大に憂ひ大切に看護する傍ら商業をも勉強して居る」

同年2月20日付雑報欄で報じられた金弥の日常生活ぶりの一コマ=写真。近所でも評判の孝行息子として動向が細かく綴られ、記者本人をも関心させたりアルな表現となっている。



この年、金弥は17歳だった。文中にある「商業をも勉強し」とは岡山県令・高崎五六が全国的にも早く岡山(現・岡山天満屋店辺)に設けた岡山縣商法講習所のことである。

前年10月に開所され、金弥は1期生として入所した。初代所長は箕浦勝人、教頭は山本達雄という錚々たる面々が赴任し、やがて夜学も開校した。士族子弟らが集い、満員になるほどの盛況ぶりだったという。

ここでも優等生であつたらしい。14年末に行われた大試業、つまり期末試験で「簿記習字作文」優等により賞品が授与されている。初の卒業式は15年7月で金弥もこの時、卒業したと思うが卒業名簿はなく、定かではない。それより私が興味を持ったのは授業である。

慶応閥コンビが舵取り役の運営に加えて、国会開設に向け世論が高潮したご時世。教室は単に商業教育を実践する場だけでなく、政談演説会や経済講演ありの、政治問題を論議する壮士養成所の感を呈していたというのだ。

多感な青少年期を講習所で学んだ金弥。政治に目覚めても不思議でなかったのか。

.....

坂本金弥59歳の来し方の中で、主な動向を探りながら「坂本金弥を語る」と題して、その人物像をたどってみた。

(坂本 昇)

有志会員 (9月末現在)

- ・ 小西 伸彦(産業遺産学会理事)
- ・ 小柳 智裕(就実大学専任講師)
- ・ 近藤 修六(医療法人六峯会理事長)
- ・ 坂本 昇(元山陽新聞編集局次長)
- ・ 柴田 正子(裏千家茶道教授)
- ・ 戸板啓四郎(中庄の歴史を語り継ぐ会代表)
- ・ 難波 俊成(岡山民俗学会理事長)
- ・ 前田 昌義(中庄の歴史を語り継ぐ会員)
- ・ 在間 宣久(元岡山県立記録資料館長)
- ・ 上田 賢一(元岡山大学非常勤講師)